

いぶ
し瓦

人と感性はここへ還る

黒いぶし
黒宝

K O K U H O

『いぶし瓦』を極める。



ミナカ小田原

伝統の継承の中で磨きあげられた匠 — いぶし瓦。
歴史に研ぎ澄まされたフォルムの美しさや、
建築修景に映える格調は、いぶし瓦ならではの意匠です。



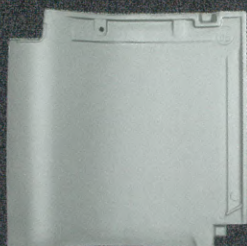
紐付袖



普通袖



多彩なデザインに対応できる
役物をラインナップ。



JIS 53判 防災



JIS 56判 防災



両深切判防災



80判

棧瓦をはじめとして屋根を構成する上で、
欠かすことのできない“役物瓦”もまた重要な素材と言えます。
いぶし瓦では、多様化する現代建築のデザインに対応できる
役物を豊富にラインナップ。



ウェーブ軒



ベタ万十軒



粒入万十軒



ストレート軒



文字軒



カマ軒



流美袖



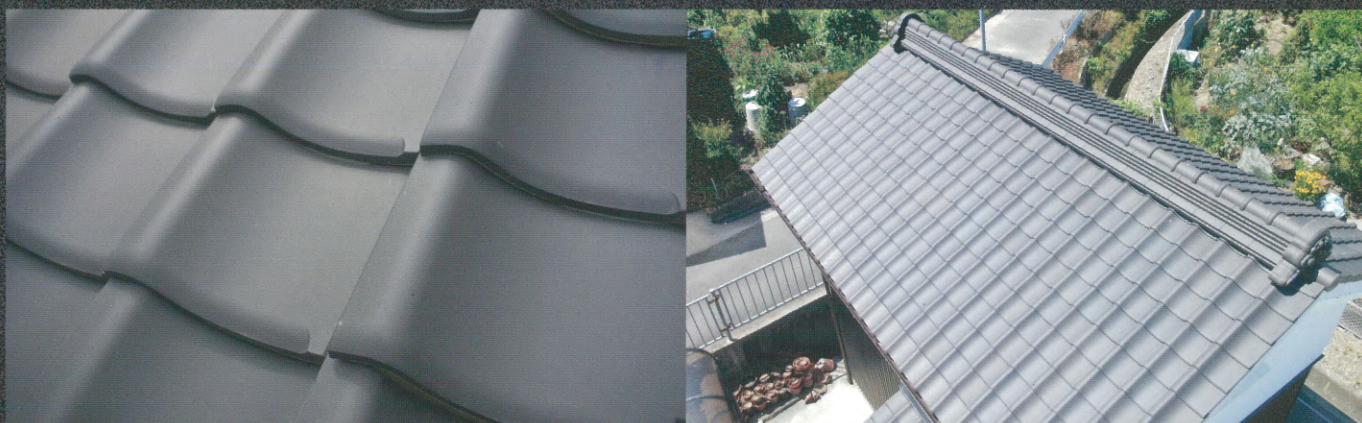
中付袖

黒いぶし 黒宝 K O K U H O

吸水率6%以下 硬質な表面



淡路島で採掘される粘土100%を使用し、
極限まで高温で焼き締めることにより誕生した「黒いぶし黒宝」
淡路瓦の弱点だった寒冷地にも適応し、シックな色合いは日本の原風景は勿論の事、
シンプルモダンな物件にもマッチします。



「いぶし瓦」と「黒いぶし」の材料(粘土)は同じですが、
淡路粘土に含まれる鉄分(Fe_2O_3)の含有率約6%あり、高温焼成することで作ることが出来ます。
他の地区の粘土では黒く発色しません。
また、表面の色と内部の色が同じの為、変色の心配もありません。
一般物件は勿論の事、寒冷地、重要伝統的建造物群保存地区の物件にお勧めです。

仕 様	
全 長	約295mm (±4mm)
全 幅	約295mm (±4mm)
働き長さ	約226mm (±4mm)
働 き 幅	約256mm (±4mm)
重 量	約3.0kg/枚
葺き枚数	約57枚/坪

安全上のご注意 ⚠

⚠ 警 告

屋根の上には乗らないでください。落下してケガをする恐れがあります。

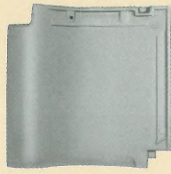
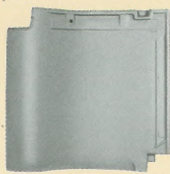


⚠ 注 意

粘土瓦の施工には専門の工事が必要です。専門工事業者にご相談ください。
工事に不備があると、落下、雨漏り等の原因になることがあります。
○寒冷積雪地域あるいは強風地域では、特殊な工事が必要とする場合があります。
こうした地域で粘土瓦を使用する場合には、専門工事業者にご相談ください。
○専門工事業者は、「瓦屋根標準設計・施工ガイドライン」を必ず参照してください。(全瓦連・全陶連 平成13年発行)

製品に関するお願い

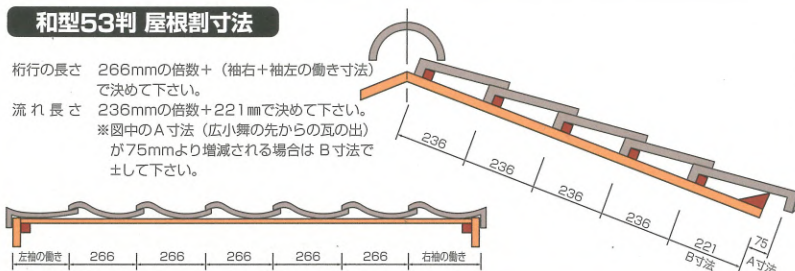
原料は淡路島産粘土 100%の自然素材。採掘場所により成分・性質は微妙に異なり、また同一場所で採掘しても均一ではありません。また「黒いぶし」は極限まで高温で焼き締めるため、下記項目にはご注意ください。
①焼成炉内雰囲気により、微妙に「色ムラ」が発生する場合があります。
②高温焼成製品の為、寸法の「バラツキ」行儀の「ネジレ」が「いぶし瓦」より多くあります。

いぶし瓦 寸法図

品 名	JIS53判 防災	JIS56判 防災	両深切判 防災	80判
製品写真				
働き幅寸法	266mm	257mm	266mm	218mm
登り寸法	236mm	226mm	194mm	186mm
坪当り必要枚数	53枚	56枚	64枚	80枚
m ² 当り必要枚数	16.0枚	17.0枚	19.4枚	24.2枚
1枚重量	2.8kg	2.7kg	2.6kg	2.0kg
面取り	○	○	○	○
切落ち	○	○	—	○

和型53判 屋根割寸法

桁行の長さ 266mmの倍数+ (袖右+袖左の働き寸法) で決めて下さい。
 流れ長さ 236mmの倍数+221mmで決めて下さい。
 ※図中のA寸法 (広小舞の先からの瓦の出) が75mmより増減される場合はB寸法で土して下さい。



勾配による流れ寸法の安全限度を下記のものとする。

製品区分	4/10	4.5/10	5/10	5.5/10	6/10
56判	9.00m	13.50m	18.00m	22.50m	27.0m
53 A判	11.75m	16.45m	21.15m	25.85m	30.55m

※瓦を実測後、割寸法を決定して下さい。

※商品の仕様・外観は改良のため、予告なく変更する場合があります。

特性・機能

「仕様規定」から「性能規定」

平成11年5月の建築基準法の大幅な改正により、屋根の工事方法も、それまでの「仕様規定」から「性能規定」に変わり、瓦製造業界と瓦施工業界が「性能規定」に沿った瓦業界独自の「瓦屋根標準設計・施工ガイドライン」を作成しました。このことを受けて、瓦の性能数値をデータ化していくことになりました。この科学技術的データに基づいた新しい施工方法を示したのが「ガイドライン工法」です。

古い建築基準法
仕様規定

「屋根瓦は、軒及びげらばから2枚通りまでを1枚ごとに、銅線・鉄線、くぎ等で下地に緊結し、又はこれと同等以上の効力を有する方法で、はがれ落ちないようにすること」

平成12年6月改正

改正された新しい建築基準法
性能規定

「屋根葺き材(中略)は、風圧並びに地震その他の震動及び衝撃によって脱落しないようにしなければならない」材料や施工方法についてはふれず、安全で優れた「性能」を満足させる屋根工事をしなさい、という指示が新しい「性能規定」のポイントです。

科学的実験・技術データ

ガイドライン工法

大型台風

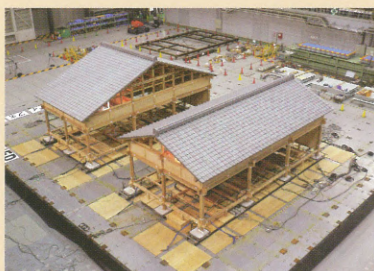
平均風速 30~46m
までクリア

地震

震度 7 をクリア

《ガイドライン工法とは》

ガイドライン工法は、これまでの災害等の貴重な経験から、建築基準法が求める“性能”以上の構造機能をめざして施工法を提示したもの。住宅設計者や屋根の工事技術者に向け、風圧力や地震力に対する構造計算、標準試験方法などを示した専門的なマニュアルです。実物大の震動実験や風圧テストを何度も繰り返し安全性能を確認するなど、科学的立場からの人念な検証は、一般消費者にも大きな安心を与えています。



伝統工法木造住宅震動台実験 (E-ディフェンス)

この工法の耐震性を確認するために、平成19年2月に兵庫県三木市にある「E-ディフェンス」で行われた、京都大学防災研究所の「伝統工法木造住宅震動台実験」に淡路瓦を「ガイドライン工法」で施工し、実験に参画しました。2棟の切り妻屋根の実物大住宅を使用して、実験で使われた地震加速度は1300ガルという猛烈なものでしたが、「ガイドライン工法」の瓦屋根は1枚もずり落ちず、阪神・淡路大震災クラスの震度7地震に耐える十分な強さがあることが証明されました。



瓦引き上げ性能試験風景



横回転加力試験風景

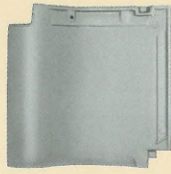
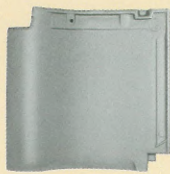


防災瓦とは

阪神・淡路大震災以降、国が要求する安全性に応えるために開発した「瓦に爪や突起物」を付けて、耐風性能・耐震性能を高めた「防災瓦」も強風地域で普及しており、地震や台風に近い瓦として、今や全国区商品になっております。

人と環境に優しい

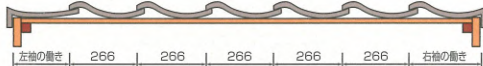
「淡路瓦」は自然の粘土を焼成して作る粘土瓦であり、粘土瓦は不燃材で耐火材。火災時の火の粉にも強く、隣り近所への類焼を防止し、有毒ガスも発生しません。また、発ガン性物質の「アスベスト(石綿)」やシックハウス症候群の原因とされる「ホルムアルデヒド」等を含まない「人と環境に優しい」屋根材です。『瓦と呼べるのは粘土瓦だけ』この言葉には、瓦が伝来して約1400年の歴史と伝統に裏打ちされた、そんな誇りも込められています。

いぶし瓦 寸法図

品 名	JIS53判 防災	JIS56判 防災	両深切判 防災	80判
製品写真				
働き幅寸法	266mm	257mm	266mm	218mm
登り寸法	236mm	226mm	194mm	186mm
坪当り必要枚数	53枚	56枚	64枚	80枚
m ² 当り必要枚数	16.0枚	17.0枚	19.4枚	24.2枚
1枚重量	2.8kg	2.7kg	2.6kg	2.0kg
面取り	○	○	○	○
切落ち	○	○	—	○

和型53判 屋根割寸法

桁行の長さ 266mmの倍数+ (袖右+袖左の働き寸法) で決めて下さい。
 流れ長さ 236mmの倍数+221mmで決めて下さい。
 ※図中のA寸法 (広小舞の先からの瓦の出) が75mmより増減される場合はB寸法で土して下さい。



勾配による流れ寸法の安全限度を下記のものとする。

製品区分	4/10	4.5/10	5/10	5.5/10	6/10
56判	9.00m	13.50m	18.00m	22.50m	27.0m
53 A判	11.75m	16.45m	21.15m	25.85m	30.55m

※瓦を実測後、割寸法を決定して下さい。
 ※商品の仕様・外観は改良のため、予告なく変更する場合があります。

特性・機能

「仕様規定」から「性能規定」

平成11年5月の建築基準法の大幅な改正により、屋根の工事方法も、それまでの「仕様規定」から「性能規定」に変わり、瓦製造業界と瓦施工業界が「性能規定」に沿った瓦業界独自の「瓦屋根標準設計・施工ガイドライン」を作成しました。このことを受けて、瓦の性能数値をデータ化していくことになりました。この科学技術的データに基づいた新しい施工方法を示したのが「ガイドライン工法」です。

古い建築基準法
仕様規定

「屋根瓦は、軒及びけらばから2枚通りを1枚ごとに、銅線・鉄線、くぎ等で下地に緊結し、又はこれと同等以上の効力を有する方法で、はがれ落ちないようにすること」

平成12年6月改正

改正された新しい建築基準法
性能規定

「屋根葺き材(中略)は、風圧並びに地震その他の震動及び衝撃によって脱落しないようにしなければならない」材料や施工方法についてはふれず、安全で優れた「性能」を満足させる屋根工事をしなさい、という指示が新しい「性能規定」のポイントです。

科学的実験・技術データ
ガイドライン工法

大型台風
平均風速 30~46m
までクリア

地震
震度7をクリア

《ガイドライン工法とは》

ガイドライン工法は、これまでの災害等の貴重な経験から、建築基準法が求める「性能」以上の構造機能をめざして施工法を提示したもの。住宅設計者や屋根の工事技術者に向け、風圧力や地震力に対する構造計算、標準試験方法などを示した専門的なマニュアルです。実物大の震動実験や風圧テストを何度も繰り返し安全性能を確認するなど、科学的立場からの入念な検証は、一般消費者にも大きな安心を与えています。



伝統工法木造住宅震動台実験 (E-ディフェンス)

この工法の耐震性を確認するために、平成19年2月に兵庫県三木市にある「E-ディフェンス」で行われた、京都大学防災研究所の「伝統工法木造住宅震動台実験」に淡路瓦を「ガイドライン工法」で施工し、実験に参画しました。2棟の切り妻屋根の実物大住宅を使用して、実験で使われた地震加速度は1300ガルという猛烈なものでしたが、「ガイドライン工法」の瓦屋根は1枚もずり落ちず、阪神・淡路大震災クラスの震度7地震に耐える十分な強さがあることが証明されました。



瓦引き上げ性能試験風景



棟回転加力試験風景

防災瓦とは

阪神・淡路大震災以降、国が要求する安全性に応えるために開発した「瓦に爪や突起物」を付けて、耐風性能・耐震性能を高めた「防災瓦」も強風地域で普及しており、地震や台風に近い瓦として、今や全国区商品になっております。

人と環境に優しい

「淡路瓦」は自然の粘土を焼成して作る粘土瓦であり、粘土瓦は不燃材で耐火材。火災時の火の粉にも強く、隣り近所への類焼を防止し、有毒ガスも発生しません。また、発ガン性物質の「アスベスト(石綿)」やシックハウス症候群の原因とされる「ホルムアルデヒド」等を含まない「人と環境に優しい」屋根材です。『瓦と呼べるのは粘土瓦だけ』この言葉には、瓦が伝来して約1400年の歴史と伝統に裏打ちされた、そんな誇りも込められています。